

## 【 特色あるフロンティアスクールの取組事例 】

都道府県番号	37
都道府県名	香川

### I 学校名及び規模

(①  ②  ③ )

観音寺市立観音寺南小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	3	3	3	3	4	20	37
児童数	79	69	91	98	82	96	6	521	

### II 実践研究の概要

- ・ 主題(テーマ)

## 教科学習の見直しと評価の改善

- ・ テーマ設定の趣旨

教師が教科の本質（育成する学力）を共通理解し、評価を改善しながら日々の授業を充実させることが、子どもの学力を向上させる。そのために、本年度は、学力向上フロンティアの取り組み1年目として、算数科を核として、授業改善に取り組む。

### III 実践研究の内容について

#### (i) 研究体制の工夫

##### ① 学年団で取り組む研修

評価の改善に取り組むに当たって、まず、教師が教科の本質を共通理解する必要があると考えた。そこで、算数4領域（1・2年は3領域）から1単元ずつを取り上げ、算数科の領域・単元・本時の指導等の本質や育てる力を明確にし、評価規準を作成する研修を学年団毎に行った。それを整理しながら単元にまとめることで、学年団全員が教える内容や方法・育てたい力について共通理解し、指導と評価を行うことができた。

##### ② カード化による情報交換

学年団で作成した各領域を内容ごとにカード化（単元セット；カードa・b・c・d・eと評価問題）し、教師が互いに情報交換しやすい形にした。そして、それをファイルにまとめて各教室に保存し、実践に活用した。このうち、カードd・e（後述実践研究の内容を参照）については、児童にも持たせ、学習過程での評価と指導に活用した。次年度に、これをさらに実践に活用しながら修正し、残りの単元についても単元セットを作り上げ、ファイルに加えていく予定である。

#### (ii) 実践研究の内容

##### ① 過程の学力の評価

授業中の児童に見られる価値ある反応をタイムリーに見取り、継続的にカードに記録していくことがより正しい子ども理解・評価につながる。そこで、「ア 算数科の関心・意欲・態度、イ 数学的な考え方、ウ 表現・処理、エ 知識・理解」の4つの観点を具体的に児童に示し（dカード）、授業中のその場で教科の見方や考え方を評価していく。それは、同時に算数科において問題解決する際、どのように考えていけばよいかを指導することにつながる。と考える。（指導と評価の一体化の成立）

##### ② 学習結果としての学力の評価

本校では、過程の学力を大切にしながらも、最終的には基礎基本となる知識を獲得し、理解を確実なものとするために、各単元毎に全員に身に付けさせたい内容を整理し（eカード）、カルテとして適宜評価していく。

(iii) 成果と課題

① 過程の学力の評価

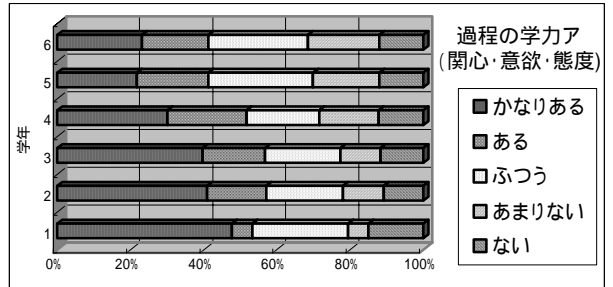
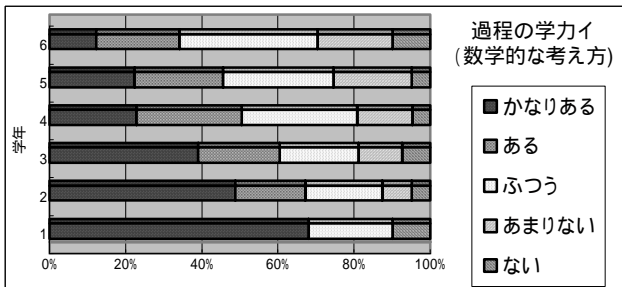
d カードにより、めざす子ども像（教科における考え方）を具体的に示し、授業の中でその求める姿が表出されたとき、具体的によさを賞賛していくこと（ポイント化）で、児童自身に、算数ではどんな考え方が大切なのか、自分にどんな学び方が身についてきたのかを気づかせる。そのために、学年段階を考慮した、2種類のdカード（1・2年用、3～6年用）を作成し、特に算数の力 ア（意欲・関心・態度）・イ（数学的な考え方）については、授業時間における評価に重点を置いた。教師は意図的に支援・指導していくことで、下に示すような力をもつ子どもを育てようとした。

【d カード〈3～6年用〉】

ぼくのわたしの算数の力	
観点	
ア	もっと便利な方法は？もっと早い方法は？もっと簡単な方法は？ いつでも、どんなときでも使える方法は？ ・・・と自分で工夫しようとする能力。
イ	習ったことを使って解ける。習った例に当てて解ける。習ったものと同じところも解けることができる。あまり考えなくても解ける。・・・と解いて解ける能力。
ウ	教科に書かれてある。知くまめる。生活の中の問題を解いた方法を調べて解ける。 本題に、ほぼ正確に解ける。・・・と正確に表現したり、説明したりする能力。
エ	算や図解の名称や意味が分かる。問題を解く方法やその方法のいいところも分かる。 分かったことを言葉で説明したり、いつでも解ける。・・・と説明したり、説明したりする能力。

このdカードを毎時間用いることで、算数のどんな力をつけていこうとしているのかが、教師にも子どもにも意識付けられた。例えば、子どもの「自分は〇〇の力（の得点）が少ないので次は～したい。」といったつぶやきやその学年なりに既習を生かして効果的に解こうとする姿等が多くみられるようになった。アンケートからも、約8割以上の子がアやイの力を意識して学習に取り組んでいることが分かる。

<子どもの算数に対する意識>



② 学習結果としての学力の評価

学習結果としての学力（ウ・エの力を中心に）の評価は、単元ごとに全員が身につけてほしい内容を整理した個々のカルテとなるeカードをもとに、学習過程の中で適宜評価していくとともに、最終的な知識の獲得・確実な理解をめざして毎日のドリルの継続や学習後・単元終了後・年間(学期)繰り返し等多様な評価により個に応じた支援が行えるようにした。

子どもへの算数に関する意識調査では、「授業中の勉強はよく分かる」と感じている子がどの学年も80%をこえており、「算数のテストは自信がある（テストが80点以上）」と答えた子どもも約80%である。また、「算数は好きですか」という問いに対しては、好きまたは嫌いでないと感じた子が80%をこえており、算数学習の充実がうかがえる。

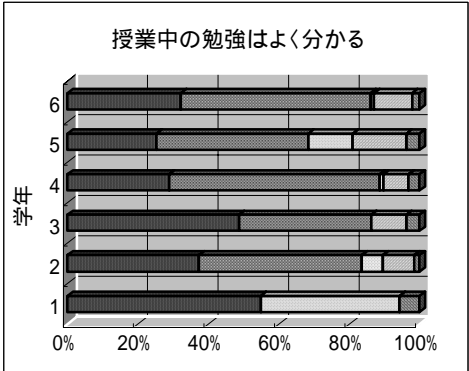
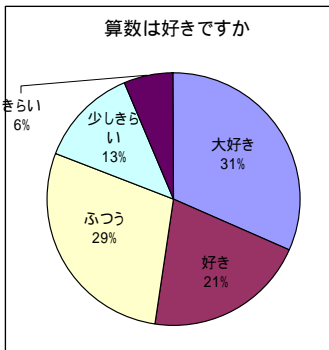
このことから、子ども自身に算数の力を意識させること、教師が算数の本質をとらえたきめ細やかな支援を計画的・継続的に行うことで、

eカード；これだけではできるようにしておこう

算数科 これだけはできるようにしておこう

学年 4年( ) 科 算数

学習内容	1回	2回	3回
1. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
2. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
3. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
4. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
5. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
6. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
7. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
8. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
9. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
10. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
11. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
12. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
13. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
14. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
15. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
16. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
17. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
18. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
19. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○
20. 二乗以上の乗法の理解が定着し、どの位乗法が得意か。単元100%	○	○	○



<子どもの算数に対する意識>

子どもは算数が好きになり、自信をもって学習に取り組むようになっていくことが期待できるといえる。

③ 全体としての評価

・ 「過程の学力」と「結果の学力」の両面からとらえた総合的な評価

「過程の学力」は、授業中の子どもの反応から見取るものであり、dカードを活用する。ア、イ、ウ、エの4つの観点でタイムリーに見取り、そのよさを数値化して与え、1学期間累積していく。

「結果の学力」は、獲得した知識や技能をテスト等で見取るものであり、eカードも活用する。単元毎に全員が身に付けてほしい内容を整理し、学習後、単元終了時、学期末等、適宜評価していく。当然、数多くのテスト、プリント類もこの評価の資料となる。

観点別の過程と結果の学力の総括的評価については次のように考えている。

〈観点別における過程と結果の学力の関連と割合〉

観点	学力評価	
	過程 授業で見取る子どもの姿	結果 テストで見取る反応
ア；関心・意欲・態度	過程 <b>7 : 2</b>	結果 *残り <b>1</b> 、学習姿勢
イ；考え方	過程 <b>7 : 3</b>	結果
ウ；表現・処理	過程 <b>3 : 7</b>	結果
エ；知識・理解	過程 <b>3 : 7</b>	結果

過程の学力評価は、「dカード」を主に活用し、最高得点の児童を満点として、以下の割合で得点化する。

評価の実際

ア；関心・意欲・態度の場合

〈過程の得点：7点満点〉例えば、「dカード」のAにおいて、最高得点が200の場合、  
 7点→9割以上、6点→8割以上、5点→6割以上、4点→4割以上、3点→3割以上、2点→2割以上、  
 ↓ (200×0.9=180→180点~200点の児童) 1点→2割未満、0点


〈結果の得点：2点満点〉例えば、テストにおいて1学期間で50点分あった場合  
 2点→7割以上、1点→3割以上、0点→3割未満

〈態度の得点：1点満点〉  
 1点→忘れ物や学習態度等が、その学年にふさわしいと判断する児童、0点→問題だと感じる児童

上述した4つの観点別に得点を合計し、A・B・Cの条件にあてはめる。そして、観点別の評価をもとに算数科の評定を行う。

\* イ；考え方、ウ；表現・処理、エ；知識・理解の場合も同様に行う。

【例】

＜評価の基準＞  
  
 A…9・10点の児童  
 B…7・8点の児童  
 C…0～6点の児童

評価の観点	得点	評価	評定
関心・意欲・態度	8	B	B
考え方	6	C	
表現・処理	9	A	
知識・理解	9	A	

これまでテストの点数が高かった子のみが認められることが多かった。しかし、このような方法で見取ることによって、学習過程で力を表出している子、はじめの段階で分かっていなかったが教師が支援することで終末までに力をつけた子等を把握した評価をすることができた。このような評価と支援により、「はじめは分からなくても、既習の物を使って解いていこうとする子」「自分で工夫して問題を解決していこうとする子」を育てていくことができる。これは、社会の変化に主体的に対応できる「生きる力」をもった子どもの育成にもつながる。

(iv) 成果の普及方策

- ・ 学力向上フロンティア事業地区別協議会での報告（平成14年8月26日・12月26日、平成15年2月13日）
- ・ 学校教育改善事業ポスターセッションでの発表（平成15年1月28日）
- ・ みなみの教育実践報告会での授業公開並びに実践報告（平成15年1月31日）
- ・ 学校ホームページでの発信（学力向上フロンティア事業のページ）<http://www.niji.or.jp/school/kannan/>